

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：42304

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：平成 23 年度 ～ 平成 24 年度

課題番号：23830121

研究課題名（和文） 家庭から幼稚園への移行に伴う母子分離に埋め込まれた価値観

研究課題名（英文） The perspective on mother-child separation at transitional period from home to kindergarten.

研究代表者

今井 麻美 (IMAI ASAMI)

高崎健康福祉大学 短期大学部 児童福祉学科 助教

研究者番号：70611888

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、家庭から幼稚園への移行に伴う母子分離は、どのような考え方や価値観によって支えられているのかを明らかにすることである。まず、「移行」に関する先行研究のレビューを行った。日本と欧米の研究を比較すると、「移行」の捉え方の違いが見出された。また、母子分離に関する母親の語りを分析した結果、母親は、入園時の子どもの姿は入園前の母親の子育ての反映であるという「ものの見方」を有していると考えられた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the perspective on mother-child separation at transitional period from home to kindergarten. This study reviews recent studies of transition. The studies of Japan compared with those of the west, the difference of perspective on transition was found out. Narrative that mother's view of mother-child separation was analyzed. Mother thought that the experience of her child at kindergarten was influenced her child rearing before enrollment.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
23 年度	800000	240000	1040000
24 年度	300000	90000	390000
年度			
年度			
年度			
総計			

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：移行 母子分離 母親

1. 研究開始当初の背景

子どもの「移行」(transition)に関する研究は、最近盛んに研究が行われている分野である。しかし、これまでの研究では、子どもがいかに新たな環境へ対処していくのかという子ども側の経験に焦点が当てられることが多かった。国内で関心が高まっている幼小連携に関する取り組みも、その目的が教育課程上のなめらかな接続(酒井, 2005)であることが多く、子どもの適応に焦点が当てら

れがちである。親側の要因が含まれた研究(例えば、菊池, 2008)であっても、子どもの移行経験に影響を与える存在として親が位置づけられており、Dalli(2002)が指摘するように、親自身が主体となる経験として捉えられることは少ない。しかし、子どもの移行は、親にとっても「幼稚園児の親」となることが求められる「生態学的移行」(Bronfenbrenner, 1996)であり、親自身の生にとっても無視できない経験のひとつ

であると考えられる。そこで、本研究では、家庭から幼稚園への移行という出来事を、親子それぞれの生における経験として捉えることとし、移行期における母親側の経験へ焦点を当てることとした。

本研究では、家庭から幼稚園への移行に伴う母親の経験の中でも、母子分離に焦点を当てることとした。現在の日本の幼稚園教育は、親子が身体的に離れることを基本的な前提としている。つまり、子どもが就園する年齢には、親と離れた場で生活することが、子どもの育ちにとって望ましいとされる価値観が埋め込まれている。また、その際の親の役割は、子どもが親から離れた場で生活することを受け入れ、支えることであることは、ほぼ自明視されている。つまり、この保育実践の在り様には、子どもの社会化やそれに対する親の役割、親子関係などに対する文化的信念が内包されていると考えられる。入園に伴う母子分離という実践に焦点を当て、その経験を明らかにすることを通して、自明視されている子どもの社会化やそれに対する親の役割などの価値観を相対化させる試みを行いたいと考えた。

2. 研究の目的

本研究では、幼稚園への移行に伴う母子分離という実践は、どのような考え方や価値観によって支えられているのかを明らかにするために、以下の2点の問いを立てた。(1) 母親の母子分離に対する考え方や価値観はどのように構築されるのか、(2) 保育現場には母子分離に対するどのような考え方や価値観が存在するのか、の2点である。本研究では、幼稚園への移行に伴う母子分離という実践を支える暗黙的な考え方や価値観を、母子分離を経験する母親とそれを受け入れる保育現場側の両側面から捉えることとした。

3. 研究の方法

①「移行」に関する文献レビューを行った。日本における先行研究は少ないため、海外における先行研究の収集、概観を主に行った。

②就園前の親へ向けた言説に焦点を当て、言説分析を行った。その際、育児知識と情報の伝達媒体として捉えうる育児雑誌(天童, 2004)、就園前の親に向けた一般図書を対象とした。

③過去に行われた母親へのインタビュー調査で得られたデータを、本研究の視点から再分析した。具体的には、幼稚園入園時における子どもの姿を語る母親の語りにも焦点を当て、主に、子どもが親から「離れられた」か「離れられない」かについての語りを対象と

した。母親がこれらの語りをどのような語り口で語るのかという視点から分析を行った。

4. 研究成果

①日本に比べて、海外、特に欧米、オーストラリアでは、移行に関する研究が多くなされている。まず、子どもの移行経験へ着目された背景を探ることとした。結果、その背景として、2点が考えられた。

まず、1点目として、子どもを取り巻く環境の変化への着目が挙げられる。すなわち、女性の社会進出という社会的な変化に伴い、子ども達は以前に比べてより幼いころから、保育・教育の場へ参入することとなった(Brooker, 2008)。それは、義務教育を受ける前から“教育”を受ける年数が増えることや、“集団”の場で過ごす時間が長くなることを意味している。また、幼い年齢段階において、家庭外で過ごす時間が長くなったこと、多様な場で多様な養育者によってケアされるようになったこと(Neuman, 2002)も意味する。このように、家庭から家庭外の保育・教育の場へ移行する年齢が、従来に比べて早まったことは、乳幼児の発達、彼らのニーズ、権利に対する私たちの見方を、改めて考え直す必要が迫られている(Brooker, 2008)。また、就学前に多様な場で子どもたちが過ごすことによって、子どもが経験する移行の数や種類が増えたとも言える。もちろん、子どもの移行の数や特徴は、その国のECECサービスの構造や質、統一性と関連する(Neuman, 2002)。

もう一つの背景として、乳幼児のケアへの国際的な関心の高まりが挙げられるだろう。特に、経済界(OECD)からは、新しい時代(21世紀)における人材育成の視点から「生涯学習」の第一ステージとしてのECECに対して、「人生の始まりこそ力強く」と、就学前の保育・教育へ関心が注がれている(泉, 2008)。これまで加盟国を対象とした大規模な調査が行われ、現在までに3冊の報告書が刊行されている。このような乳幼児の教育・ケアへの関心が、子どもたちの幼いころの発達と学びにおける連続性や一貫性を提供することへの重要性へ気づかせ始めた(Neuman, 2002)。

さらに、欧米、オーストラリアの先行研究と、日本のそれとを比較すると、「移行」の捉え方の違いが見出された。海外では、子どもの移行の経験を発達の機会として捉えているようだ。例えば、Brooker(2008)は、移行に成功することによって、より強力なresilience(困難に対して粘り強く対処し続ける)、resourcefulness(問題処理の方法を色々考えつく)、reciprocity(他者と協同的、建設的に行動できる)を獲得できると述べている。その一方で、日本における移行に関す

る議論、とりわけ幼小連携に関する議論では、幼小間における段差をなめらかにすることが目的とされている。つまり、段差を経験することを発達機会として捉える海外の見方からすれば、日本における議論は発達機会を奪おうとしているとも考えられる。つまり、子どもにとっての移行という経験への価値づけが大きく異なると考えられる。

また、子どもの移行期における母子分離に対する母親の経験に関する先行研究は非常に少ないものの、家庭からケアの場への初めての移行期における母親の経験を検討した Dalli (2002) では、この経験について語る中で、「良い母親であること」というテーマへ様々な形でとらわれたり、探究したりする母親の姿が明らかにされている。さらに、母子分離を巡る語りの中では、「母親とは」というテーマが見え隠れしていることが見出された。従って、移行に伴う母子分離という実践に焦点を当てることを通して、母親が素朴に持っている家庭教育、母親への概念を相対化させる試みは、有効であると考えられた。しかし、移行に伴う母子分離と一口にいっても、子どもの年齢によって、母親の経験は異なると考えられる。Dalli の一連の研究は、乳児が家庭からチャイルドセンターへ移行する現象を対象としており、例えば、子どもが“母親から捨てられた”と捉えてほしくない、と語る母親の存在が指摘されている。それに比べて、日本における幼稚園へ入園することには、母親自身にも、周りの人間に対しても、「正当」な理由が存在する。つまり、家庭から幼稚園への移行場面は、その他の時期において母子分離することとは意味合いが大きくことなり、それが、母親の経験へ大きな影響を与えていると考えられる。従って、海外の先行研究を参照しながらも、現代の日本における「家庭から幼稚園への移行」という経験の特殊性や、暗黙の価値づけを、意識的に相対化しなければ、この時期の母親の経験には迫れないことが示唆された。

②まず、分析対象となる書籍、育児雑誌や、行政資料の収集を行った。収集された文献の中から、就園前に準備しておくべきこと、就園前までにできていた方がよいこと、就園へ向けた心構えなどに関する記述、母子分離に関する記述などを抽出し、記述の内容を整理した。実際には、このような記述内容が少なく、文献の対象を広げる必要性が明らかとなった。入園前の幼稚園見学の際や、入園直前の説明会等で、配られる資料等も、今後は分析対象とする必要が示唆された。

さらに、以上の結果から、書籍や育児雑誌を通して、入園時の母子分離に対する価値観が直接的に構築されるというよりは、家庭教育を重視する傾向の一端として母子分離場

面を捉えうる可能性が示唆された。この点については、今後の課題としたい。

③幼稚園で子どもが親から「離れられた」「離れられない」という母子分離に関する母親の語りには焦点をあて、この語りの解釈を通して、母子分離に対する母親の「ものの見方」を明らかにするため、分析を行った。

結果、入園前に多くの母親は、子どもが「離れられる」のか、「離れない」のかを予想していた。そして、子どもが「離れられなかった」場合、その原因を追究していた。その原因として語られたのが、【入園前の過ごし方】、【子どもの性格】、【自身の子育て】であった。そして、これらの責任を自分自身として捉えている傾向があった。つまり、入園時の子どもの姿は、入園前の母親の子育ての反映である、という「ものの見方」を有していると考えられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計2件)

①今井麻美 母親が保育者を意味づけることの意味：親と保育者を対置する語りに着目して. 日本保育学会 第66回大会. 2013年5月11日. 中村学園大学

②今井麻美 子どもの家庭から幼稚園への移行期における母親の経験：子どもが親から「離れられた」「離れられない」事態をどのように語るか. 日本保育学会 第64回大会. 2011年5月22日. 玉川大学

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今井 麻美 (IMAI ASAMI) 高崎健康福祉大
学短期大学部児童福祉学科 助教

研究者番号：70611888

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：